

ゆにはな人

親の介護の際に パン教室も 開講

はやかわ・たかえ

1957年、浦幌町生まれ。帯広三条高校を卒業後、東京の短大へ進学。1980年に結婚し、大学4年の長男、高校3年の二男、高校1年の長女がいる。家族のためにパンづくりを始め、東京の自宅でパン教室を開催。子育てが一段落した8年前、本格的にパン教室を開きたいと、ジャパンホームベーキングスクール東京本校に通い、準師範の資格を取得。現在、自宅で7クラスを開くほか、東京本校でもパンづくりを教えていた。98年に父親が脳こうそくで倒れ、看護を続けた母親に疲れが見えていた昨年、帯広市街地のマンションを購入。月に1度、母親のサポートのため父親の介護で通う際に、パン教室を開いている。最近は、十勝の小麦で作るパンの試作にも積極的に参加する。47歳。東京都在住。

両親にマンション購入

98年、当時浦幌町に住んでいた父親の石丸恭朗さん（73歳）が脳こうそくで倒れ、母親の玲子さん（70歳）が看護を続けてきました。しかし、疲れが見え始め、父親も車イスでないと移動が困難になったことをきっかけに昨年、「浦幌の古い住宅での介護は無理と思い、帯広駅前と早川さんは振り返ります。

弟や夫の協力もあつて

札幌で暮らす一人の弟とも相

うですが、実際に目の当たりにしてみて、この住宅で介護は難しいと感じてくれたようです。夫の理解あってのマンション購入でした」と夫の協力にも感謝していると話します。

パン教室をバネに

持っている上、パン教室の仕事もあり、介護をする日程の調整はなかなか大変そう。

「私自身も介護だけ、ということなら続かなかつたと思うんです」。早川さんは「介護のために自分が犠牲になりたくない」と、月に1度、訪れるのを利用して両親のマンションの1室でパン教室を開くことを決めました。「私を待ってくれる仲間がいると思うと、うれしいですね」と楽しそう。

同級生とも再会して

パン教室には、中学や高校生の同級生も参加してくれます。「私たちの年代は、親の介護や子ども、夫のこと、自分の自己実現のために」と、いろいろ忙しい。なかなか友だちに会う時間を作るのも大変です。でも、パンづくりというキーワードがあることで、集まつてもらえる。介護をしている状況にも共感してくれて、励みになりますね」。

もちろん大半は初対面の人たち。「でも一度パンづくりをして、わいわいとみんなで試食したら、パン教室は続きます。パンの発酵のように、ゆっくり、月に1度の介護とりじっくり、月に1度の介護と



本日のパンは「メロンパン」。クッキー生地がさくさくで中はふんわり。



ゆにはな人
Univa

通う自分も両親も 気分軽やか



パンの指導に当たる早川さんは、どうでも楽しそう。



真剣にパンづくりに取り組む生徒さんたち。この日はすでに5回目とのことで、大分手慣れてきた様子。眺めのよいマンションは、教室としても気持ちいい空間。「芽室出身の母にとって、嵐山が見えるのも心和むよ

